ジェンダーフォーラム主催　市民講座「サザエさんに見る家族の戦後史」

『サザエさん』をネタに、家族の変化を読み解いた

―　樋口恵子さんの講演とブックトーク―

2019 年 6 月 7 日(金)、日本のフェミニズムを長年牽引されてきた評論家の樋口恵子さんを講師にお迎えして、市民講座「サザエさんに見る家族の戦後史」を開催しました。本年度前期の GF 読書会では、樋口さんの著書『サザエさんからいじわるばあさんへ－女・子どもの生活史－」(朝日文庫)、『私は 13 歳だった』(筑摩書房)を輪読し、昭和の世相や歴史、家族のあり方について議論を深めました。これをきっかけにして、樋口さんと親しい間柄の井上輝子本学名誉教授の尽力で、この講座が実現しました。

今回の講座は、第 1 部の講演と第 2 部のブックトークの二部構成でした。第 1 部の講演には、100 人程の市民や学生が参加しました。そこでは、漫画家・長谷川町子の作品である『サザエさん』と『いじわるばあさん』の中に描かれているエピソードを素材にして、家族の変遷についての詳しい解説がなされました。現在ではアニメ版のほうが馴染み深いかもしれませんが、元々『サザエさん』は新聞の 4 コマ漫画です。1946(昭和 21)年から夕刊フクニチ紙で連載が開始され、その後、朝日新聞の朝刊で 1951(昭和 26)年から 1974(昭和 49)年まで 24 年間連載が続きました。この作品には戦後復興期から高度成長期にかけての日本社会の様子がつぶさに描かれています。また『いじわるばあさん』は 1966(昭和 41)年から 1971(昭和 46)年にかけて『サンデー毎日』で連載され、このふたつの作品は女性の視点で戦後を描いた貴重な資料でもあるそうです。

『サザエさん』と『いじわるばあさん』の家族構成ですが、どちらも三世代同居家族です。年齢は『サザエさん』の磯野波平が 53~4 歳で定年間近（当時の定年は 55 歳)、サザエ・マスオ夫婦は 20 代後半~30 代、タラちゃんは幼児です。一方、『いじわるばあさん』の主人公である伊知割石(いじわるいし)は 70 代後半、同居の息子夫婦は 50 代、孫は社会人と大学生です。このふたつの作品に登場する家族の年齢構成は、その時代の一般的な家族の年齢構成に対応しています。

終戦直後、戦争による被害があまりにも甚大であったため、日本人の平均寿命は、1945 年は男性 23.9 歳、女性 37.5 歳と著しく縮みますが、朝日新聞で『サザエさん』の連載が開始された 1951 年は男性 59.57 歳、女性 62.97 歳、さらに『いじわるばあさん』が終了した翌年の 1975 年は男性 69.31 歳、女性 74.66 歳です。磯野波平も伊知割石もその時代における最晩年に近い世代ですが、平均寿命は 10 年伸びています。樋口さんは、「サザエさん一家は人生が 50 年だった時代の家族構成であり、日本人が長生きするようになったことで、連載が終わった 70 年代には日本の標準家庭ではなくなった」と分析されていました。現在（2017 年）の平均寿命は男性 81 歳、女性 87 歳で世界トップの長寿

国であり、磯野波平世代からは男性 22 歳、女性 25 歳、伊知割石世代からは男女ともに 12 歳平均寿命が伸びています。「長寿社会は平和と一定の豊かさの象徴である」と樋口さんは述べておられましたが、その時代の状況が平均寿命からも読み取れます。

また、きょうだい構成を見ると、サザエは、カツオ・ワカメとの 3 人姉弟で、伊知割石には息子が 3~4 人おり、それぞれに 1～2 人の子がいます。1 人の女性が生涯に産む子どもの推計人数(合計特殊出生率)の推移を見ると、1950 年 3.65 人、1970 年 2.13 人、2018 年は 1.42 人です。『サザエさん』や『いじわるばあさん』の時代にはきょうだいがいるのがあたり前でしたが今は違います。『サザエさん』にはノリスケのような親族も登場しますが、きょうだいがいない人が多くなると、「三親等以内の親族がいない人も増えてくるだろう」と樋口さんも述べておられました。ファミレス(family-less)社会です。

ところで、50 歳時点で結婚経験がない人の割合(非婚率)は、1970 年では男性 1.7%、女性 3.3%でしたが、2015 年には男性 29.5%、女性 18.7%と上昇しています。サザエさんの家族が理想的だと聞くこともありますが、現在は、ひ孫の誕生と成長を見守ることができるほどの長寿社会であり、他方で、結婚しない人の割合も増えています。少子化により、家族や親族のあり方も変わらざるを得ません。家族は、時代とともに変化し、多様化しているといえるでしょう。

第 2 部では、「サザエさんが陽気で明るく自由に振舞えるのは、サザエさんが「嫁」ではなかったからではないか」という第 1 部の問題提起を受けて議論がスタートしました。戦前の家父長主義のイエ制度における「嫁」の役割は過酷であり、女性をイエの持ち物として扱う人権侵害がまかり通っていたことが改めて確認されました。樋口さんは、柳原恵著『化外のフェミニズム』(ドメス出版)を例に挙げて、イエにおける嫁に対する性暴力の
事実を指摘されました。第 1 部でも、終戦直後の満洲で行われた戦時性暴力に触れましたが、「今なお日本の女性の地位はあまりにも低い」と力強く語られる樋口さんの姿は印象的でした。

その他、戦争が家族に与えた影響についての質問に対して、樋口さんは「盧溝橋事件から太平洋戦争終結までの 15 年間の戦争は、当時世界に例のない長期間の戦争であり、この間、男性が戦場に赴いていたことが戦後も続く父親不在の家族のあり方に大きな影響を及ぼしたはずだ」と分析されていました。悲惨な戦争体験により心身に深い傷を負ったことで、家族との生活に様々な軋轢や悲劇を生みだしたのではないかとの参加者の意見もありましたが、現代まで続く過酷な働き方や性暴力への無関心などは、戦時下の軍隊を彷彿とさせます。　戦後 74 年がたちますが、私たちは戦争の残滓に悩まされているのかもしれません。あの戦争の延長線上に現在があることも再認識した実り多き講座でした。

(阿野理香・ジェンダーフォーラムスタッフ)